
星がくれた一ヶ月間

暁 琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星がくれた一ヶ月間

【Nコード】

N5118F

【作者名】

暁 琥珀

【あらすじ】

私は風上姫香。13歳。親？いないよ。死んでしまってるもの。おばあちゃんも10歳の時に亡くなった。この学校には特待生できているの。何も失くすことなんてないから、楽かな。泣かなくて済むのはそのおかげかもしれない…。これは、そんな私を振り返った日々。

11月2日 いつもの同じ日々（前書き）

ちよっぴつと恋愛混ぜます。

苦手な方はご遠慮下さい。。

11月2日 いつもの同じ日々

「ひーめかー！」

私を呼ぶ声。

別にいいといったわけでもないのに、呼び捨てで呼んでくる人。
この失礼な男子の名前を、『神崎^{かんざき}満』。

これが、モテるって聞くと、吐き気がする。

さらに、これが幼なじみなんて・・・。

・・・最悪。

「姫香、お前、またトップだぜ！！スゲーよなっ！」

手に持っていた、テストを目の前に突き出す満。

スゲーって、褒められるのも、飽きていたし。

毎回毎回、先生とコイツ^{みちる}に言われてる言葉だしさ。

親に言われないのが、まだマシなのか、寂しいというのか・・・。

「ほつといてよ。先帰ってて。」

あー・・・も、邪魔だなあ・・・。

満、一向に引く気なさそうだし。

「んな冷たいこと言わないでも・・・。

・・・何描いてんの？」

て、あ、満！

「ちょ！？返してよ！私のスケッチブック！！」

「へへ〜ン♪」

取れるモンなら、取ってみろ！」

・・・こんの、陸上バカ！

いくら狭い屋上でも、美術部の私が追いつくわけ無いじゃんっ！

・・・屋上の風は、秋の風になりかけていた。
ひんやりと冷たい、夕暮れの風。
この風の中で、私はふと思った。

『この平凡な日々が、ずっと続けばな』って。

でも、それは簡単に消え失せてしまう願いだった。
そう、簡単に・・・。

星が、光を失ってしまうように・・・。

* * *

「風上。この問題の答えは？」

「・・・はい。X=12です。」

どつと、クラスから、喚声上がる。

こんな問題、解けないほうが可笑的い。

先生が、黒板の問題に丸をつけ終わったあと、私のほつに振り返った。

「屋上、行ってもいいぞ。
どうせ、ドリルも終わってるんだろ。」

この先生は、他の教科の先生より、ずっと甘い。
ま、やってない人に対しては、相当な怒りを買っけど。

「じゃ、そうします。」

立ち上がると同時に、みんなの視線が集まる。

・・・別に、いつものことだし。

シンと、静まったクラスに、再び笑いが戻ってきたのは、満の一言だった。

「センサーーイ！じゃ、俺もっ！」

「馬鹿者。神崎、お前ワーク、P35まで終わっているのか？」

「う……。やってません。」

「じゃあ、この時間、クラスからすることも許せんな。
他の皆だって、少なくともP40までやってるはずだぞ。」

この先生の言葉に、バツとそっぽを向く人、数人。
満と同じ、サボリ組だった。

そして、こんなバカ会話に、クラス中大笑いの嵐。
・・・。

・・・笑えない・・・。

どうして皆、こんな会話が面白いと思うのかな？
教えている先生のみにも、なってみなよ・・・。

何も言わずに、教室にドアに手をかけたときだった。

「風上さん、やっぱり笑わないんだね。」

「うん。なんか無表情なロボットみたい。」

「生まれてから、一度も泣いたこと、無かったりして。」

・・・おいおい。

陰口のレベル、低すぎだよ。

しかも、ロボットかよ。

・・・あ、でも、泣いたこと無いのは確かか。

なんだか泣いたこと無いなんて、普通ありえないけど。

私は例外。

生まれてからも、赤ちゃんの時も、

無表情で、夜鳴きもしないで、空を見ている子だったみたい。

詳しくは知らないけど。

だって、私の親、事故で死んじゃってるもん。

生まれてすぐ・・・らしい。

おばあちゃんか、そういつていたけど。

・・・本当かな？

て、こんなこと嘘ついたって意味無いけどね。

ロッカーから、スケッチブック（満から取り返した）を取り出し、
筆箱の中から、鉛筆と小さな消しゴムを持って、教室を出る。

クラスの皆は、満と先生の会話で笑っていたが、
廊下に出ると、静かなものだった。

時が流れてるって、感じられないくらい。

足音のひとかけらも無い廊下は、少し開いた窓からの風で、しんみりと冷たかった。

「・・・あ、早くしないと時間終わっちゃう。」

つぶやくと、気持ちがなんとなく暖まった。

正直、廊下に一人って、心に穴が開いたみたいに、何か体が抜けてくような、寂しい感じがするから。

風が吹いたと同時に、屋上への階段を目指して廊下を歩いた。

* * *

11月3日 春香の見学

私はまた、屋上に来ていた。

相変わらず、あの数学^{ひと}担任は甘い。

100近くある階段を上りきると、そこは冬が近づいた場所だった。
…というか、冬だった。

「んー。」

スケッチブックを持ってきたものの、なんだか描く気がしなかった。
寒い、っていうのも理由の一つかもしれないけど…

この風景を、私の手で絵にするのはもったいなかった。

夜に此处にこれるのなら、此处で絵を描いてみたい。

冬は星が綺麗に見える、最高の季節。

これくらい空に近ければ、それだけいいものが描けると想うんだけどなあ…。

「…星…か。」

お母さん、お父さんも星になっているのかな？

お婆ちゃんがいった。

死んでしまった人は皆、星になって、生きている人を見守るんだよって。

…。

星は確かに綺麗で、小さくて、^{はかな}儚い。

一生が燃えているだけなのに、一生懸命光り輝いて、終わりまで輝いていようとする。

生きること、一途なんだなあ、って、よく想う。

人間も、同じように生きられればなって想う時もある。

でも、そんな人生を送る人なんて、いないんだって、想う時もある。
…そんなことを考えてる私って、ホントになんか可笑しい。

と、かなり下から声がした。

「ひーめかセンパイー!!」

…。

この声で、大体検討は着いた。
風向きを、その声一つで変えられる…。

そんな人、そうそういない。

起き上がって、柵越しに下を見る。

…やっぱりな。

ふわふわにカールされた茶色い髪。(ちなみに遺伝らしい。)

小さくて、可愛くて、それでいて間抜けっぱい。

クリツとした瞳と、キュツと結んだ口。合わせるようにレース付き
のワンピース。

…間違えない。春香に違いない。

春香意外にこんな人がいたら、是非ともお目に掛かりたい。

「春香ー。どうしたの？」

「ここ、中学校だよ?」

もはや叫んでいるような声で、話しかけた。
何しろ、8階だ。

…まさか、場所を間違えた、ってことはないだろう…。

春香は私を見ると、目をバツと輝かせた。
当てずっぽうで呼びかけたみたい…。

「中学校見学ですっ!」

絶対つ、先輩と同じここ、入りますからっ！」

「難しいよっ、ここはっ！」

特待生&学費免除で入っている、私が言うのもなんだが…。

ここ、市立月代学園は、世界的に超一流。

寄付金トップ、偏差値80以上という、最高レベルの学校なのだ。

ちなみに、何故此処に満がいられるのかは不明だ。

それで、寮生活というのは、ある一定の生徒だけが使える。

私は特待生、っていうのも理由の一つだけど、

それ以上に、親がいなくて言うのが一番の理由だった。

まあ、春香なら、親は金持ちだし、成績も上のほうだった…気がするから、

これないって、訳ではないと想うけど…。

流行語で言えば、『K・Y』だからなあ。（古い）

クラスの中で、うっん、学校の中で一番の偉業だったからなあ…。
面談で落ちなければいいけど…。

下で小さくくしゃみの音がした。

…寒いよね。その格好じゃあ…。

「待ってて、先生に聞いてみるっ！」

呼びかけると、春香はすぐに顔を上げ、

「……はいっ！」

と、威勢良く返事をした。

…やっぱ、大丈夫だったかなあ…。

春香が職員玄関の方に向かったのを見て、方向転換。
1階までの長い道のりを、一気に駆け下りた。

* * *

「はあ、あつたかですう。」

「はい、紅茶。」

「あ、ありがとうございますっ!」

春香は、紅茶の入ったコップを受け取ると、
そのまま口に持っていた。

「あーっつ!」

「…。」

はい。

ゆっくり飲みなさい。火傷します。

ここは応接間。

私は特別に、授業中だけどこにいます。

まあ、引き入れたのは元々私だしね。

まず、この子の場合、先生では手がつかないと想うし。

うん。

「あれ？姫香先輩は、授業でなくてもいいんですか？
もうすぐテストの季節ですよ？」

「ん？あ、それは全然余裕！。

とゆうか、春香。そっちは平気なの？学年末テスト。」

「ギクウッ！」

効果音をわざわざ口に出す、春香のおもしろいところ。
いつ聞いても飽きない。

…と、まあ、

こんな感じでしゃべってた。

と、おなじみのあの音。

キーンコォォーンカァーンコォォーン

「あ、終わった。

春香も、もう帰ったら？」

と、扉に手をかける。

「先生には私から言っとくね。
あ、上着、忘れないでね。」

そういつて、部屋を出たは…ず。

バタンツッ！

「……………！？」

どうかしたの？春香？」

…びっくりしたあ。

春香が扉を押し閉めた。

こんなにかわいい格好して、力は恐ろしいもんねえ…。

その顔でまず、こんな子だとは、誰も思わない…。

「…はっ、すいませんっ！驚かすつもりじゃなかったんですっ！！」

「わ、判った……てか判ってるからっ。

とりあえず落ち着いて。」

結構な説得（？）の末、春香は落ち着いた。

…いや、疲れた。

走り出すと止まらないってのがよくわかる。

「で、なに？」

「ええっと…。

…なんでしたっけ？」

「…。」

私に聞かれても…。」

うん…まあ、ここが春香のいいところだからね。
しょうがない…としよう。

その後、頭を抱えて唸ってる春香を帰して、
私も教室に戻った。

…何となく、変な気分だった。

* * *

11月4日 灰色の空

「学年テストまで、後3日だ。
みんな、気を抜くなよー。」

「はあいー。」

なんてゆーやる気のない返事。
私もその中の一人だったとして。
それはいいの。問題は今日の占い。

占いとか、お呪いとか、あまり信じないほうだけど…むしろ信じないけど…。

…ワースト1。

つまり12位だ。

内容はこう

「今日は思っても見なかったことに気がつき、大混乱っ！

自分だけじゃなく、周りの人達まで巻き込む大事件が起こりそう…

ラッキーアイテムは、ピンクのキーホルダー！」

何気ない、他人事の明るい声で、ニュースの「お姉さん」は言った。

…。

あはは。

馬鹿げてる。私もなに思い返しているんだろう。

占いなんて、月と年で決められているのを放送しているだけ。直に毎回占っていたら、ブーイングの嵐だ。

占っている人の大惨事だ。…そうでしょう？

でも…私って、本当に馬鹿だ…。

そつと机の側面を見る。

茶色い革でできた、教科書がぴったり入る大きさのハンドバック。そのポケット近くにぶら下がっているものが、ピンク色のクマのキーホルダー…

…ああ、まさに恥…。

自分でもこんな趣味はしてない。

なにより自分が占いを信じてしまっている…頼っているように思えてしょうがない。

でもなんとなく…いつもより当たりそうで怖い。

占いに頼ってしまうほど、何か不吉な感じがしていた…。

と、まあ…

若干の不安を感じつつ、いつもどおり屋上へ向かった。

今日は冷えているから、カーディガン所持。

「ペンキ塗りたい」の看板を無視して、錆が出始めている扉を開けた。

今日は曇り。

昨日、少し雨が降ったからか、コンクリートは湿っていてすわれそうにない。

一面、灰色の世界…。

時折ふわふわ落ちてくる茶色い落ち葉。

柵越しに地面を見れば、地球に引つ張られて落ちた葉が、冬の寒さから地面を守るように広がっている。

もうすぐ雪が落ちてくる。

落葉が終われば次は冷えて固まった氷。

大空の結晶となった雪は、冷え切った地面に落ちると、姿を元の「水」に戻す。

想像した。

「秋」の役目を終え、カビ臭くなってくる落ち葉の上に、「冬」を告げるために空から遣わされる雪。

それらが地上に降り立ったとき、役目を終え、また始まりに戻る――

私は、「四季」が好きだ。

それぞれの風景があつて、それぞれの氣候があつて…

毎年毎年、同じことの繰り返しだけど、

星がずっとあるように、ずっと続く…続かなきゃいけない「当たり前」。

人が生きているのも…「当たり前」

…。

それは何か違う気がする。

生まれて、ものを食べて、空気を吸って、夜には寝て…

当たり前すぎてわからない。

自然への感謝も忘れさせてしまう「当たり前」。

嫌だった。

星もそう。

好き。私でさえ、一言でしか表せない。

何れ燃え尽きて消えてしまう存在なのに

小さすぎて、名前さえ付けてもらえずに消えていってしまふ星だつて、あるはずなのに…。

どうして、そんなに必死に輝けるの？

見てくれる人なんて、誰もいないのに。

「当たり前」に平和ボケした私たちに、何を伝えたいんだろう。

ふっと、空から白い使者が舞い降りた。

今日…結局なにも起こらなかったな。
やっぱり…所詮はインチキ占い。

何で、ここまで心配したんだろう。

…あはは。どうしたんだろうね、私。

なにも…起こるわけがないのに。

普段どおり、平和ボケした「当たり前」の生活が、あるはずなのに…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5118f/>

星がくれた一ヶ月間

2010年10月28日06時28分発行